

《三船の才（大鏡）》①

ある年、入道殿（道長）が大井川で船遊びをなさった時に
一年、入道殿の大井川に逍遥せさせ給ひしに、
漢詩の船、管弦の船、和歌の船とお分けになって、
作文の舟、管弦の舟、和歌の舟と分たせ給ひて、
それぞれの芸道に優れている人々をお乗せになったところ、
その道にたへたる人々を乗せさせ給ひしに、
この大納言（公任）が参上なされたので
この大納言の参り給へるを、

《三船の才（大鏡）》②

入道殿（道長）が、
入道殿、
「あの大納言は、どの船に乗りなさるのだろうか。」
「かの大納言、いづれの舟にか乗らるべき。」
とおっしゃったところ、
とのたまはすれば、
（それを人づてに聞いた大納言殿は）「和歌の船に乗りましょう。」とおっしゃって、
「和歌の舟に乗り侍らむ。」とのたまひて、
（次の歌を）お詠みになったのですよ。
詠み給へるぞかし、

《三船の才（大鏡）》③

小倉山や嵐山から吹き下ろす強い山風が寒いので、

小倉山 嵐の風の 寒ければ

（紅葉が散りかかって）紅葉の錦の衣を着ない人はいないことだ。

紅葉の錦 着ぬ人ぞなき

（和歌の船に乗ることをご自分から）

お願いしてお引き受けになっただけあって、（みごとに）お詠みになりましたなあ。

申し受け給へるかひありてあそばしたりな。

ご自分でもおっしゃったとかいうことには、

御自らものたまふなるは、

《三船の才（大鏡）》④

「漢詩の船に乗ればよかったなあ。

「作文のにぞ乗るべかりける。」

そうしてこのくらいの（今詠んだ和歌に匹敵する）詩を作ったとしたら、

さてかばかりの詩をつくりたらましかば、

名声が上がるようなこともきっと強まったであろうに。

名の上がらむこともまさりなまし。

残念だったことよ。

口惜しかりけるわざかな。

それにしても、入道殿が、『（大納言は）どの船に（乗ろう）と思うのか。』

さても、殿の、『いづれにかと思ふ。』

とおっしゃったのには、我ながら得意にならずにいらなかったよ。」

とのたまはせしになむ、我ながら心おごりせられし。」

とおっしゃったそうです。

とのたまふなる。

《三船の才（大鏡）》⑤

一つの才能が優れていることさえ珍しいのに、
一事の優る**だ**にあるに、

このようにどの芸道にも抜きん出ていらっしゃったようなことは、
かく**いづれの道も抜け出で給ひけむは、**

昔にもございませんことです。

いにしへも侍らぬことなり。